

動物愛護センターの新たな役割 ～福祉関係機関との協働～

長野県動物愛護センター

○松澤淑美 高橋葵 宮本仁志

小林正直 坂本淳 小木曾悦人

1 はじめに

長野県動物愛護センター「ハローアニマル」では、2000年開設以来、人と動物が共生する潤い豊かな社会をつくるため、教育関係機関との連携による「動物ふれあい教室」「出前教室」「職場体験」「不登校支援事業」等積極的に取り組んできた。

平成25年度からは福祉関係機関との協働事業を実施した。支援を必要とする子ども達が週1回1時間就労体験をする「ふれジョブ」の受入れ、さらに成人に対して月1回の就労体験を「ボランティア活動」として受入れた。

これら福祉関係機関と協働した支援事業は、地域社会の一員としてのハローアニマルの新たな役割と考えられたので報告する。

2 実施方法

(1) 「ふれジョブ」の受入れ

- ①実施期間：平成27年5月から平成28年6月現在
- ②対象：K市内のふれジョブ事務局から依頼された中学生女子3名
- ③実施内容：事前に仕事内容を打合せた後、ひとりにつき毎週1回1時間6カ月間就労体験を実施した。体験中は地域のボランティア（ジョブサポーター）が付き添った。体験の様子は、毎月1回開催される定例会で、本人・ジョブサポーター・保護者から発表された（表1）。



(2) 成人「ボランティア活動」の受入れ

- ①実施期間：平成25年7月から平成28年6月現在
- ②対象：20代男性1名
- ③実施内容：障がい者支援施設から依頼を受け、毎月1回2時間ボランティア活動として就労体験を実施した。3カ月に1回開催されるケア会議で本人および関係機関で情報を共有した（表1）。



表1 ふれジョブ及び成人ボランティア活動の受入れ状況

	学年	性別	障がい	体験内容	定例会・ケア会議での報告
A	中1	女子	発達障がい	施設周辺の草取り、ヤギ舎周囲の草取り、落ち葉掃き、ふれあいルーム床のモップ清掃	犬に触われるようになり、特定の小型犬と良好な関係を築けた。自信を持って体験できた。
B	中2	女子	発達障がい	施設周辺の草取り、落ち葉掃き、ふれあいルーム床のモップ清掃、モルモットフードの磨り潰し	我慢ができるようになり感情表出が穏やかになった。他者を気遣う言葉の発言があった。
C	中3	女子	発達障がい	施設周辺の草取り、子猫フードの磨り潰し（離乳食用）、チモシー栽培	熱心に取り組んで能率も高い。動物への関心が高く、飼い方や病気に関する質問も多い。
D	20代	男性	発達障がい	うさぎケージの清掃・給餌・給水、子猫の社会化、猫の運動、犬の散歩（ボランティア活動）	動物の扱いに関して自信が付き、生活に張りが出た。感情を言葉にすることができるようになった。

3 結果及び考察

「ふれジョブ」とは、2003年に岡山県倉敷市で始まり現在24都道府県で行われている活動である。毎週1回1時間、その地域に居住するジョブサポーターが付き添い、地域の企業で就労体験をする。毎月1回定例会で報告しながら6カ月間継続する。障がいのある子が学校と自宅を往復するだけではなく、学齢期から地域社会の一員として居場所を持つようにする。地域社会に暮らす人々に対しても、障がいのある子ども達と接する機会を増やし、地域が活性化され、障がいのある子が地域社会に溶け込み、障がいの有無にかかわらず共に生きていくことができる社会となることを目指すといった活動である。

当所は、受入れ企業（事業所）として参画し、本人に実行可能で短時間に完結し達成感の得られる体験内容の提供を心がけた。体験は直接動物に触れる内容ではないが、全て動物のために役立っていることを説明し本人に感謝の言葉を伝えた。また、一般来館者対象に日常実施している「猫とのふれあい(15分間)」にも毎回参加してもらい、猫について学ぶ機会とすると同時に本人のモチベーションを上げることに役立てた。その際、優しく上手に猫とふれあえたことを褒められ、自信がついていく様子が観察された。

本事業が有効に機能するために、受入れ事業所は、職員に過度の負担がかからないよう、安全管理がしやすく、やってもらってありがたいと思う仕事をお願いし、終了後は心から感謝を伝えることができる内容を提供することが重要であった。

定例会では、自信を持って発表している子ども達の姿と、ジョブサポーターから「回を重ねるたびに子どもの大きな成長が感じられ感動をもらった」、保護者から「本人の変化を感じ、地域に拓せることが分かった」との発言があった。成人のボランティア活動におけるケア会議でも同様に本人の成長が顕著で受入れに対する感謝の発言があった。

我々動物愛護管理行政に携わる職員は、どんなに誠意を持って苦情対応にあたって、地域住民から感謝の言葉を受ける機会は多くない。本事業は、一見障がい者を支援しているようで、実は職員自身が感謝の言葉に支えられ励まされ「人のための動物愛護施設」という位置付けで地域社会に認知され、住民から頼りにされるという動物愛護センターの新たな役割を見出す機会となった。

<参考>

全国ふれジョブ連絡協議会 ふれジョブ7箇条